護衛艦「ひゅうが」艦上での海洋安全保障シンポジウムに参加して

東京財団理事長
秋山　昌廣

昨年 10 月、海上自衛隊設立 60 周年を記念して護衛艦「ひゅうが」の艦上で、「海洋安全保障シンポジウム」が開催された。これは、海上自衛隊と海洋政策研究財団が共催したものだが、そんな関係もあって当時財団の会長を務めていた私は、シンポジウム第 1 部の司会を依頼されていた。

実は、平成 21 年も海洋政策研究財団は海上自衛隊と共催で、同じ護衛艦「ひゅうが」で艦上シンポジウムを開催している。このような形式でシンポジウムを開いたのはこの時が最初だった。したがって、昨年は 2 回目であったが、海洋安全保障に関するシンポジウムを護衛艦の艦上で開催するのは大変意味のあることであると思う。議論の対象は海であり、また、安全保障であるから、海上自衛隊の装備の中心である護衛艦の艦上において議論をし、考えることは、感覚に訴えるものがあり、かつ効果的である。山の中で議論するよりも、都会で議論するよりも、明らかに意義深いと言えるだろう。海軍が安全保障活動の対象とする海は、厳しさとロマンスを兼ね備えている。私自身、船に乗ると、海を見ると、感情が高ぶり同時にロマンチックな気分になるのを抑えられない。

一般に参加する人たちも、ホテルの会議室で話を聞いたり、教育機関で勉強したりするのとはおよそ異なり、艦上での会議には、海への関心も高まるし海洋国日本を意識する。一般参加の応募も多数に上り、抽選による当選率も厳しかったと聞く。しかも、今回は、海上自衛隊 60 周年を記念して、このシンポジウムとは別に、護衛艦数隻が横浜大桟橋に係留されて訪れる多くの市民に一般公開され、さらに彼らを対象に各種イベントが繰り広げられ、海に関するムードが高まっていた。

今回のシンポジウムは、「安全保障のグローバル化と海上自衛隊」という副題の下、第 1 部のテーマが「我が国の安全保障への取り組み」、第 2 部が

「海洋安全保障の課題と国際協調への展望」というものであった。

第 1 部におけるパネリストは、慶応大学教授の阿川尚之氏、前警備救難監の向田昌幸氏、船主協会部長の保坂均氏、前防大校長の西原正氏、海洋政策研究財団主任研究員の秋元一峰氏、元海幕長の古庄幸一氏、海幕防衛部長の山下万喜氏の 7 人であった。第 1 部の持ち時間は 2 時間なので、各自最初の一言を 7 分以内でとお願いした。

阿川氏は、咸臨丸とポーハタン、戦艦三笠と巡洋艦オーガスタなどにおける日米海軍の協力関係の歴史を熱っぽく話され、向田氏は海上保安の視点から、海上警備行動ないし平時の海上自衛隊活動について氏の見解を詳しく述べた。時間がオーバー気味だったが氏の熱弁を切ることはしなかった。

続く保坂氏は、海上輸送と日本商船隊の実情、航行安全阻害要因、海賊問題などを豊富な資料に基づき包括的に説明したため大幅に時間を超えたが、これも大変参考になると考えそのまま説明を続けてもらった。次いで、現役の山下氏から「日本のシーパワーの変遷と将来」というテーマで、戦前からの歴史的推移、冷戦終了後の海上自衛隊の体制整備と役割、そしてグローバルな安全保障環境にいかに海洋国家日本が対応していくかという展望について、さすが自衛隊幹部、ほぼ時間を守って効率的に説明いただく。

実は、4 人のパネリストの「冒頭発言」で、1 時間を悠に越えてしまい、司会者として失格であったが、残る西原、古庄、秋元各氏には、発言の超短縮（2，3 分）をお願いし、ご了解を得る。西原氏は「この少ない防衛予算で本当に日本を守れるのか」と強く懸念表明、古庄氏は海のロマンスと海洋戦略を語り、秋元氏は司会者に代わりパネリストの発言に対するコメントと質問をしてくれたので、直ちに議論に入る。

フロアからの質問も結構受けることができたが、答えるのはどうしても山下防衛部長が多くなる。私も議論に参加したりして、あまり中立的な司会者ではなかったが、艦上での第 1 部の議論は大変盛り上がったのではないかと感じた。それでも司会の不手際（とも本当は思っていないが）30 分程度は時間をオーバーしてしまった。

後半の第 2 部は、海自幹部学校副校長の山本敏弘氏の司会で、「海洋安全保障の課題と国際協調への展望」を議論した。ここでは、米国から在日米海軍司令官のダン・クロイド少将、英国からアンディ・エドニー国防武官、豪州からエイミー・ホーキンス 1 等書記官が参加したほか、日本からは石井正文外務省審議官、西正典防衛政策局長、大塚海夫海幕指揮通信情報部長の 3

人の現役幹部が参加した。もともとは中国の国防武官を招聘していたが、9月以降尖閣諸島問題が極度に緊張したことがあったためであろう、結局は参加しなかった。

海洋安全保障の課題を議論するには少し時間が不足気味だったが、それでも国際協調への展望では、いろいろと興味ある意見表明がなされたと思う。

最後に福本出海自幹部学校長から閉会の辞を述べて、時間オーバーのシンポジウムも無事終えることができた。

個人的なことだが、私にとって印象的なことは阿川、向田、保坂、西原各氏のみならず、参加した海上自衛官幹部山本、大塚、山下、福本各氏が、今までいろいろなところで共同作業をした友人ばかりであったことである。石井、西、両文官幹部はもちろん恒常的に接触していた人であるが、このようなことになったのは、海洋政策研究財団がこの 10 年間、海洋安全保障に大きく関わってきた結果であると思う。また、海洋政策研究財団の秋元主任研究員（退役海将）が、この間、海幕との関係を大事にし、緊密化してきた結果とも言える。旧運輸省系の海洋政策研究財団が防衛省の内局ではなく海上幕僚監部とこれほど緊密な共同作業ができるということに、ややオーバーかもしれないが隔世の感を禁じえなかった。